

松のきれいな神さま（生田区）

生田〈いくた〉神社は、はじめ布引の砂子山〈いさごやま〉というところにまつられていました。

ある年、大雨がつづき、とうとう大洪水〈こうずい〉になってしまいました。土砂はくずれ、松の木は根こそぎ洗い流されて、神社の建物は押し流されそうになりました。砂子山は松がたくさんはえていたので、洪水には強いと考えられていたのです。

そのとき、神主〈かんぬし〉の刀禰七太夫〈とねのひちだゆう〉という人が神さまを背負って、ふもとへのがれていきました。

洪水はものすごく、にごった水の中を現在の土地までたどりつくと、もう一歩もあるけません。

これは、きっと神さまはここにまつれというおぼしめしだと感じて、社〈やしろ〉をたて神さまをおまつりしました。これがいまの神社だといわれています。そんなことから生田の神さまは、「松の木はたのみにならぬもの」とおきれいな神さまになったといわれています。



そのため、生田神社の森には松の木は一本もなく、クスノキばかりです。境内〈けいだい〉にもとあった能舞台〈のうぶたい〉の背景となる鏡板〈かがみいた〉にも、お定まりの松ではなく、杉の絵がかいてあったといわれています。

ことにかわっているのは、正月にも松飾〈まつかざり〉りはしないで杉飾りをすることです。それは、本殿の正面に杉の枝をたばねて山のように盛りあげ、その上にすすきを五方に出します。それから、十二本のしめ縄〈なわ〉を張りわたすのです。もし、閏年〈うるうどし〉ならしめ縄を十三本にするのです。神社としては珍しい風物です。

これは一月十五日のどんどの日に、取りのぞいて焼いてしまうのです。

平城〈へいじょう〉天皇の大同〈だいどう〉元年（八〇六年）に朝廷〈ちやうてい〉から生田神社へ四十四戸と、長田神社へ四十一戸の神戸〈かんべ〉をつけられました。

神戸〈かんべ〉というのは、大むかしに朝廷から名のある古い神社に付属〈ふぞく〉されて、税〈ぜい〉（租〈そ〉・庸〈よう〉・調〈ちやう〉）といわれる現物や労役のこをその神社におさめる封戸〈ふこ〉（税をおさめる家）のことで、その税で、神社の修理やおまつり、神主の手当てなどをしていました。それらの封戸を神戸といったのです。これがいまの「神戸〈こうべ〉」の地名になったということです。